

Facebookに独歩没後110年事業という特集サイトがあります。110周年記念として全国各地さまざまなイベントが行われた様子が掲載されています。ホームページ「独歩の四季」が全国の独歩ファンが集うサイトになったと考えると、いろいろな情報が集まるサイトの構想を考えています。

# 独歩の最期の周辺

今年は、独歩忌を六月二十三日にいろいろな都合で開催できず、第百十一回独歩忌を二十七日に国木田独歩館において実施しました。独歩が生きていた時代は、落語が隆盛してきた時期と重なり、人情話の落語を二題、県南落語組合の方にやっていただきました。

その後、中島礼子先生と宮明会長代行とのトークで、独歩の最期の周辺を



語ってもらいました。

まず最初に寶河原真一さんに「怪気の火の玉」を語ってもらいました。この話のあらすじは、「橘屋さんという鼻緒問屋のご主人が堅い人で女遊びをしたことがなかったが、ふと誘われ吉原で遊んだ。今度は自分から通い始めた。

本妻は怪気(嫉妬)に耐えきれず、藁人形に五寸釘で「カチーン」と杉の木に打ち付け、妾をのろった。お妻さんも藁人形をカチーンと打ち付けた。それを聞いた本妻は七寸釘でカチーンと呪った。橘屋さんの蔵の脇から陰火(鬼火)が根岸に向かつて飛んでいった。と、根岸から陰火がふあふあくと飛んで、大音寺前で火の玉どうしがカチーンとぶつかる大騒動になった。話を語り聞かせて居ると、ご主人、たばこが飲みたくなるが火が無いので、お妻さんの火の玉を近くに呼んで、たばこを付けて一服味わう。その内、本宅から上がった陰火が唸りを上げてものすごく、飛んできた。呼び止めるとびたりと止まった。また火が欲しくなりこちらにおいて」とキセルを出すと、火の玉

いでしょ、フン!。という落ち。

次は品光賢さんから「宮戸川」を語ってくれました。このあらすじは、小網町に住む半七は、友人宅で将棋を指して帰りが遅くなり、家に入れてもらえず、締め出しを食ってしまう。すると、友人宅でカルタをしていて帰りが遅くなり、同じように締め出しを食ってしまった幼なじみ・お花と行き会う。半七は叔父の家に泊ることにしていた。お花は「そこで私も一晩お世話になりたい」と半七に申し出る。うぶな半七は「叔父にいい仲だと勘違いされると、どうなるか分からない」と断り、一人で行くとする。遠くで雷が鳴りはじめ、雷におびえるお花は半七に取りすがって、叔父の家までついてきてしまう。案の定、半七とお花は叔父に勘違いをされて、布団がひと組しか用意されな

いまま二階の部屋へ通される。ふたりきりになると、お花は半七に對しまんざらでもない態度をとり

は始める。そのうち、雷が大きく鳴り響き、お花は半七の胸元へ飛び込む。すると、」

独歩の生きた時代は三遊亭圓朝と同年代で口語落語が盛んになり、その影響を独歩も受けた。二つの話もどちらも艶のある話であったが、独歩は艶福家で、女性との関わりがかなりあったようである。独歩の最期の百四十日間ほどを過ごした南湖院においてもそのような噂があったということを中島礼子先生と宮明さんのトークで語ってもらいました。



## 朝日・大分合同新聞に紹介された東光庵 塩釜桜

大分合同新聞の三月十四日に塩釜桜のことが掲載されました。「明治の文豪、国木田独歩も訪れた佐伯市青山の東光庵で、塩釜桜(しおがまざくら)が見頃を迎えた。暖冬の影響で例年より早めに開花。15日ごろに満開となりそう。」

東光庵にある桜は2本。青山地区公民館によると、1本は樹齢数百年の古木、もう1本は大正時代に倒れた大木からひこばえで育った樹齢100年ほどの桜という。趣ある姿は市民に親しまれている。

ヤマザクラの一種とみられ、全国的に有名な宮城県塩釜市の八重桜「シオガマザクラ」とは別種。同公民館は「命名の由来ははっきりとしない。かつての住職が宮城県塩釜の出身だったとも、散った花びらが境内を真っ白に染め塩釜の結晶に見えるからともいわれている」と説明する。

庵に向かうこけむした石段を上がると、枝いっぱい白い花を付けた2本が来訪者を迎える。

傍らにある「独歩文学碑」では、独歩の日記「欺かざるの記」の一節を紹介。花が散った後に同所を訪れた独歩が「落花紛々の景を賞する」(そののみにても満足)と感じたことを刻んでいる。

23日ごろまでは夜間にライトアップを実施。午後7時〜9時半に夜桜を楽しむことができる。

同公民館の河野謙二館長(66)は「古くから多くの人に愛されてきた。満開も落花も美しい。楽しんでほしい」と話している。

### 三月十七日朝日新聞大分版に青山の塩釜桜が掲載されました。

「大分県佐伯市青山黒沢地区の東光庵の庭にひっそり咲く二本の桜の古木が満開を迎えている。「塩釜桜(しおがまざくら)」と呼ばれ、連日多くの人たちが見物に訪れている。東光庵は無住寺だが、地域の人たちが桜とともに守ってきた。塩釜桜の名の由来には、「散った花びらが塩釜にできた塩の結晶に見えた」「かつての住職が宮城県塩釜市の出身だった」など様々な説があるという。二本は山桜の一種で真っ白い花を咲かせる。一本は樹齢数百年、一本は樹齢百年ほどと言われる。また、東光庵には一八九三(明治二十六年)年、私塾「鶴谷学館」の教師として赴任してきた文豪国木田独歩も、訪れたことがあるという。」



藤浦武久先生撮影  
題名 塩釜満開



藤浦武久先生撮影  
題名 桜花散る庭

### 「豊後の国佐伯」冊子を成人式で贈呈

佐伯市教育委員会より成人される方に佐伯のよさをより知ってもらうためにも、国木田独歩の「豊後の国佐伯」の冊子を成人式の時に贈呈したいのだがという依頼を受け、200冊を頒布させていただきました。写真は贈呈の様子です。

### 中島礼子先生 最近の出版

中島礼子先生が大学を退職されて、著述に専念されていて、公刊されました。週間読書人には、次のような書評が乗っていました。

「独歩の文学を、本書の著者・中島礼子氏は「生物的生命を視座とするヒューマンエコ・システム」と呼んで高く評価する。まさに独歩は現代に甦ったといえよう。」

「本書の特徴としてまず指摘したいのは、独歩の妻・治子の作家活動に論及した点である。」

「独歩会にも寄贈していただきました。」

# 国木田独歩「源をぢ」の命名と「春の鳥」起筆の着眼点を探る

古市 木村一郎

国木田哲夫(以下敬称略)が、鶴谷学館の教師として赴任したのは、明治二十六年九月三十日徳富蘇峰の推薦によるものであった。当時満二十二歳。二十六年二月から「欺かざるの記」を起筆。この日記に基づいて、佐伯時代の見聞や、佐伯の身近な題材をもとにした作品「源をぢ」「春の鳥」を地元読者としてその成立をさぐってみたい。伯来当初は旅館を転々とした。十月十七日ごろから鶴谷学館の館長でもある坂本永年宅に寄寓した。鶴谷学館授業開始時刻の夕方ごろから通勤していた。十一月二十六日「源をぢ」の主人公の一人乞食紀州に会っている。実在の人物で池船橋下に居住して鶴谷学館付近の広辻に食べ物を採りて出沒した。二十七年七月一日に葛港の鎌田旅人宿に転居。七月二十二日鎌田夫婦から「源をぢ」の主人公に当たる人物の身の上話などを聞いています。源をぢは古くから渡船業(おろし)の高原嘉次郎ではないかと推定されている。

一方、紀州であるが、紀州の墓が養賢寺に実在する。墓碑銘には「紀州の墓」野嶋松之助 明治四十年一月三十日池船橋下歿。享年三十三歳 別府市八雲短歌会田吹繁子建立」と刻されている。紀州の生年月日が判明した。筆者の木村家は広辻(現広小路)のごく近くに居住し、紀州に食物などを与える機会もありかつ、哲夫先生の通勤経路にも近かった。哲夫の生徒茂(祖父)の両親(曾祖父、曾祖母)とも接する機会もあったと思われる。私の高祖に「源左エ門」と称する人がいる。この「源左エ門」の「源」をとって題名を付けたと考えられる。その墓は哲夫奇遇先の坂本家の隣地にある。佐伯藩の家臣で鶴谷学館館長坂本永年とは旧知の間柄であったと推定される。曾祖母エイと養子の曾祖父辰蔵の年齢差(十三歳)は小説池田源太郎百合の年齢差(二十八、九と小娘)ほぼ同じで、辰蔵は当時青山村村長であった。このような関係が「源をぢ」の登場人物の設定に影響したものと考えられる。青山村黒沢の桜は有名である。青山村の村長として、哲夫に桜の木を紹介したと思われる。(哲夫二十七年四月一日青山村黒沢の桜見に遠行) 小説「鹿狩」の文中の参加者に「郡長さんにも

「源をぢ」の職業は渡船業(おろし)である。しかしなぜ「源をぢ」という題名をつけたのか疑問のままであった。従って葛港のおろしの「源をぢ」(高原嘉次郎説)と広辻で紀州に関係する生徒茂の祖父(当時すでに故人)の源左衛門を「源をぢ」とし、葛港の風景や渡船業(おろし)の生活と、木村一家の紀州との広辻での関わり合いや、一家の年齢構成を利用し

最初に「源をぢ」について考えてみる。源おぢは、源おじさんのこと東京で使用される言葉である。佐伯の方言では、源じい 源にい 源おいさん 源おいやんで源をぢとは言わない。

深く経験したものでないと理解できないと思われる。私の自然に接した体験を少しお話しさせていただけ。子供のころ南郡五町村に居住し、その風景や生活に接した後、東京の 文京区 千代田区新宿区等に勤務し、武蔵野の面影が残る国分寺町、渋谷区等に居住した。時代こそ違いますが哲夫の生活圏とほぼ同じである。ワンダールホーム部、写真倶楽部の山岳写真愛好者とともに、最初は関東一円(山々から、やがて穂高連峰、後立山連峰 八ヶ岳連峰、浅間山等を撮影した。二十五キロ超える荷物と、目まぐるしく変わる厳しい気象状況との戦いであったが、山岳写真を撮影したい一心で努力した。秋の奥穂高岳山頂、富士山まで続く青い山脈に地球を。浅間山山麓、夜空に輝く無窮の星に宇宙を。北穂高岳山頂、ブロッケン現象に神を感じ、更に八ヶ岳連峰主峰赤岳、厳冬の生死をかけて拝む元旦の「日の出」は、苦しみを征服した喜びと、神への荘厳な祈りとなった。その後、『多摩川と人』をテーマに笠取山水源から中流の武蔵野の一部、羽田飛行場まで自然とそこに生きる人を撮影。東京銀座と大阪御堂筋にて倶楽部写真展『多摩川』を開催した。このような経験は私も哲夫も田舎に育ち、より自然を愛し宗教を信仰

て小説化したものと思われる。最後に死因については冒頭で申し上げた哲夫が、二十六年十月十四日前後の一週間は大雨大洪水に見舞われ三回転居するなどかつてない恐怖を体験している。この体験が小説「源をぢ」の死因の着眼点となっている。佐伯で体験した嵐と病気を組み合わせ、墓を大入島と葛港が望まれる妙見様の丘にしたものと思える。

次に「春の鳥」について。哲夫が城山について、国民新聞に発表した『豊後の国佐伯』と、

有限会社 ヒロ  
**裕**  
佐伯市中村北町1-12  
Tel 0972-22-2917

果てへと、もの悲しげなる音の漂うさまは、魚住まぬ湖の真中に石一つ投げ入れたるごとし。「この文章は養賢寺墓所の最上段に位置する坂本家の墓より町内を俯瞰的に眺めたものと一致する。

哲夫は人間を自然から切り離して考えることのできない人であった。小学生のころ東京、山口県内を数回転居し、山口中学在学中には両親が住む萩まで八里の道を徒歩で帰省した。自然を知るための基礎体力と、自然を肌で感じとる下地となったものと思える。哲夫は東京専門学校英語政治科に学んだが、やがて精神的なものを求め、政治家の野望を否定し、文学やキリスト教を信じることになった。明治二十四年一月四日麹町一番町教会において受洗している。更に明治二十五年九月にはワーズワース詩集を手に入れ佐伯「城山登山」の友とした。哲夫の佐伯における散策や逍遙、また地元の人

し、ワーズワースの自然の中に神を見るという考え方に共感できる。哲夫は佐伯の自然はいいが、人間はいやだと東京に帰っていた。(二十七年八月一日 日清開戦の日)が、後に城山と題する回想文の中で「佐伯の春先づ城山に來り・・・以下略」簡勁で清新な詩を佐伯町民に残してくれた。感謝。

**参考文献** 若き日の国木田独歩 佐伯時代の研究 小野茂樹著 アポロン社  
現在日本文学館2 二葉亭四迷 国木田独歩 文芸春秋  
豊後の国佐伯 国木田独歩作品集 佐伯独歩会

小説で書いた、佐伯城跡の立体的空間と、移りゆく自然の時間的空間が、舞台となつていく。奇遇先の実在する知的障害のある少年をモデルにして、自然に融けこむ「天使」としてとらえ、「自然」と人間」を不可分の認識対象としている。中嶋礼子(国士館大名誉教授)氏の研修資料ではワーズワースの詩集を入手し、ワーズワースの詩の世界を、独歩流に小説が展開されて消化し、佐伯をワーズワースの詩の世界として読みかえると説明された。小説としての構成については、出会いから主人公の最期を空想し、墓まで考える、当時の小説の定型であったかと思う。以前書いたように源左衛門の墓は哲夫奇遇先の坂本家の隣地にある。哲夫が現実に坂本家のお墓に参られ、現存する童子の小さいお墓の戒名「慧空童子」を見たとき、母親が墓の周りをぐるぐる回りながら「なんだってお前は鳥のまねなんぞした。え、なんだって石垣から飛んだの?・・・」と、春の空に自然と一体になって鳥となり、飛んだ場面が想起され展開されたと思えるのである。源左エ門の墓が右におよそ五メートルに童子の墓がある。小説「源をぢ」「中段」「城山の麓にて撞く鐘雲に響きて、屋根瓦の苔白きこのまちの果てより

哲夫の異様なまでの自然逍遙と、神を信仰する体験は自然をよ

